

3人の先生から学んだ指導理念

鈴木健次郎 寺脇研 船越準蔵

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)



私の父は歯科大学在学中に学生相撲に打ち込んだ。卒業後は郷里に戻り、歯科診療の傍ら、自宅の空き地に土俵をつくり、地域の青年団の相撲指導と中学生の野球にも深く関わっていた。

「スポーツは勝たねばならない」と言い張る地域の方々を相手に、「スポーツは勝つことよりも大切なことがある」と主張し、孤軍奮闘していた姿を、当時まだ小学生だったのに、今でも鮮明に覚えている。父は学生相撲を通して、学生スポーツのあり様を学んだようだ。父のスポーツに対する情熱と使命感は、私の心の中に息づいている。私が小学生時代に何げなく耳にした大人同士の会話が、長い間小学生の野球に携わり、スポーツにこだわり続けるきっかけになった。スポーツ精神の基礎は小学生時代に形成されることを身を以って体験した。「何のためにスポーツをするのか」については、感受性旺盛な小学生の時代に、わかりやすく、丁寧に伝えるのが大人の大切な役割である。しかしながら今、小学生のスポーツは表面上は子どもの健やかな成長と発達のために行われることになっているが、現実には目に余る競技化が進み、低年齢化している。こうした殊のほか勝利を至上とする社会風潮のもとで、自分の考えを鮮明にして主張し続けることは、そんなに簡単なことはなかった。

親しい友人からも、「三浦！お前の青臭さは古代の遺物、白神山地クラスだ。だから、死ぬまで直らないだろう…」とからかわれることもしばしばだった。

学生時代に少しは野球を体験したとはいえ、「スポーツ指導」「教える」ことには全くの素人。そのうえ、準備不足でのリトルリーグ結成だったため、それらを補うにはスポーツの指導書、教育書、子育てに関する著書などに頼る以外なかった。出来る限り、幅広く本に触れるように努力をしてきた。その中でも、とりわけ、秋田高校元校長鈴木健次郎先生、元文部省寺脇研先生、恩師船越準蔵先生の教えは、活動を継続するための力強い後押しとなった。子どもたちと接する際の基本中の基本の考え方になっている。

○元秋田高校校長 鈴木健次郎先生

ー 熱意が人を動かす ー

鈴木健次郎先生は、学校を離任するにあたり、在校生を前に次のように語った。(退任演説の一部)▷「スポーツと学業の両立は極めて困難なことである。私はそのことを十分承知している。しかしながら、なお、諸君にはスポーツと学業の両立を強調した。それは一人一人がその目標に向かって、何事にもくじけない信念と、何事にもくじけない意思と、何かを創造する力を諸君に期待しているからである」▷「伝統があるとか、歴史が長いとか、設備が整っているとかは、必ずしも良い学校の条件ではない。良い学校とは、生徒一人一人が、学業に対しても、スポーツに対しても、日常の生活に対しても、常に積極的な姿勢を持っているかによって決まる。だから、常に諸君には毎日の自覚ある生活と厳しい毎日の鍛錬の生活を要請したのであ



る」後輩から拝借した「退任演説」のCDを車の中で聴いた。先生の母校と生徒たちへの深い愛情に圧倒され、車を何度も停め、涙をふいた。涙ながらに語る「退任演説」を通して、「熱意が人を動かす」ことを学ぶ。

○元文部省高等教育局 寺脇研先生

ー 一人一人が自己実現できる教育 ー

今から30年近く前になるが、東京八重洲ブックセンターのエスカレーターを上がった踊り場に山積みされた、「動き始めた教育改革」（寺脇研・主婦の友社）が目にとまり、すぐに購入した。スカイブルーの表紙が今でも脳裏に焼きついている。リトルリーグ結成直後で不安を抱えていた時期でもあり、殊のほか「なるほど、なるほど」と思える珠玉の言葉の数々があった。▷親の画一的な価値観の押しつけが子どもの心を追い詰める。▷テストの成績により一点刻みで序列づけするのではなく、それぞれの良いところを発見し、伸ばし、認めていく。教育界の言葉で言えば、一人一人が自己実現できる教育システムをつくるのが大事です。▷私自身、中学2年生の春に自殺を図った経験があります。父に勧められ、進学を売り物にする中高一貫私立高校に入って間もなく、大学入試を最優先する周囲の風潮にどうしようもないあるものを感じるようになりました…。

先生の常に子どもの目線、立場に立った一貫した評論、主張には教育改革への半端ではない本気度が感じられる。だから説得力がある。少年時代の体験が関わっているのだろうか。

2008年、ご多忙のところ地域の学校後援会で「21世紀を生きるための力」と題して、ご講演を頂いた。直接先生とお会いし、改めて子どもたちへの限らない温かい心と人間性豊かなお人柄に触れる。

○中学校時代の恩師 船越準蔵先生

ー 次の時代をつくるのは子どもです ー

▷素晴らしい時代は、にわかにはやってきま

せん。しかし、子どもを人間性豊かに育てることへの挑戦は、いつか必ず芽を吹きます。それは次の時代をつくるのは子どもだからです。

▷「三浦くん！今は少数でも、百年たてばあなたの思想は必ず花開きます。いつになるかわからない『その日のために』情熱を燃やすことこそ、男のロマンでしょう」▷人間性を高める究極の目的も、スポーツ活動も、勉強も、「わが身に代えても人を愛する心を育てること」「助け合って生きる温かい心を育てること」だと私は思います。「人を愛する心を受けた子どもは人を愛する子どもに育ちます」先生のお宅にお邪魔すると最後には決まってこのような内容のお話を頂いた。

私が新聞などに拙文を投稿しても、すぐにお手紙を頂き、「あなたはまぎれもなく少年スポーツの評論家だ」「インパクトもあり、いい文章だった」などなどと、赤面する程過分に誉めてくれ、その気にさせてくれた。自己主張の強い教え子の私を、教師としていつも心配してくれていた。先生の心温かい励ましが、継続の大きな力になった。



今、世の中が騒然としている。常識をはるかに超えた非人道的事件や出来事が国内外で相次ぎ、枚挙にいとまがない。私はこうした世相と、小学生の時期に人間性を育てることを手抜きし、勝つことを至上の目あてにしている日本のスポーツ志向とは、あながち無縁とは言い難いように思う。

「競争で得た地位と能力は一時的で、将来を保証しない」とする先人の言葉を思い出す。こんな世の中だから、青臭いガキっぽい理想論を馬鹿まじめに説き続ける者も必要なのだと、勝手に自分に言い聞かせ主張を続けている。

遅きに失した感はあるが、最近、「勝利至上主義是正」の話題を耳にするようになった。耳を澄ませば変革の足音が少しずつ聞こえて来る。